

『従軍行』『出塞行』 王昌齡

辺境警備兵士の心境を詠う「辺塞詩」二題

従軍行 王昌齡 従軍行 王昌齡

秦時明月漢時關 秦時の明月漢時の關

萬里長征人未還 萬里長征人未だ還らず

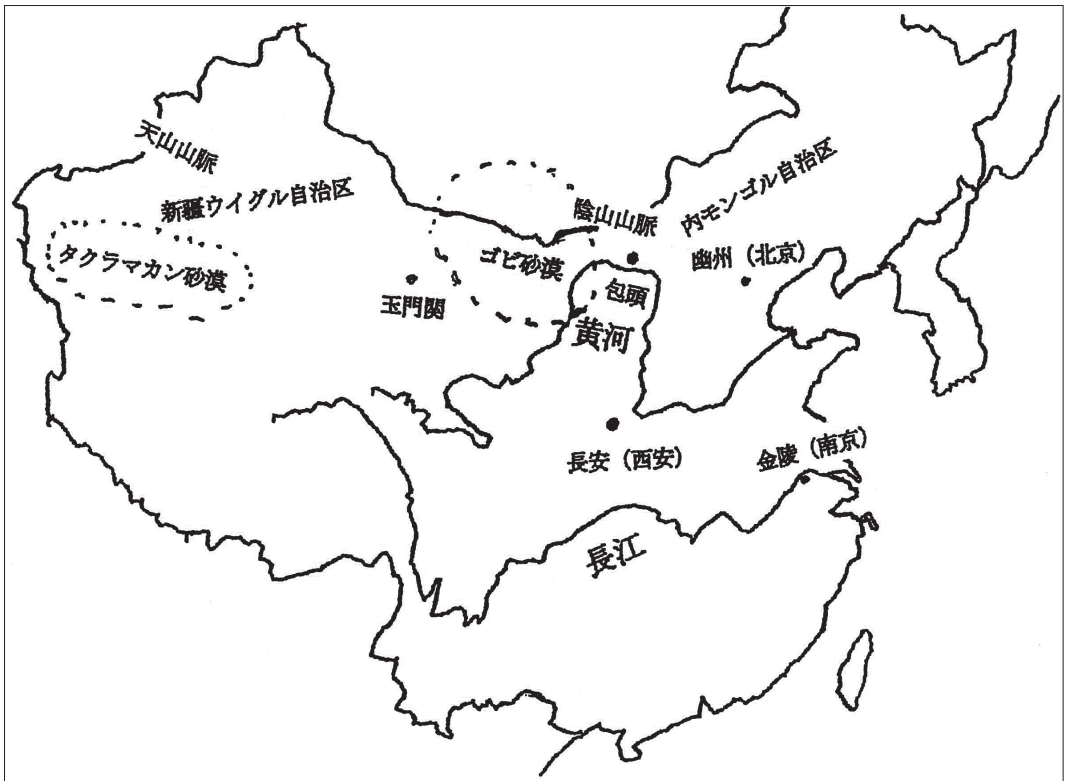
但使龍城飛將在 但龍城の飛將をして在らしめば

不教胡馬度陰山 胡馬をして陰山を度らしめず

【意解】

明月は秦の時代と同じく国境地帯に輝き、城塞は漢の時代と同じく昔と少しも変わっていない。また、今なおはるか万里のかなたにまで遠征した兵士たちは、今もお懐かしい故郷には帰っていないのだ。

もし「龍城の飛將軍」と畏怖された李広のような名將が今の世にいたならば、異民族の騎馬隊に陰山山脈を越えて侵入させるようなことは無かつただろうに。



【字解】

従軍行 三国時代（魏の王粲^{おうざん}）以来の樂府題。主として北、西方辺境への従軍兵士の苦しみを描く。「行」は歌・吟・引・曲などと同じく歌辞的詩題に用いられるもので、「うた」の意味。

漢時関 漢時代の関所。ここでは城塞をいう。

人 遠征の兵士一般をいう。

龍城 匈奴の聖地・根拠地。

飛將 前漢の武帝に仕えた名將軍・李広

（？→前一九）のこと。

教 「使・令」などと同じく使役の助字。

【鑑賞】

この詩は辺塞詩の傑作の一つに数えられる。ことに「秦時名月漢時関」と詠うこの第一句が優れている。

月が辺境の城塞を照らすという発想に、秦と漢の名を加えるとき、そこには複雑な連想が重なり合う。秦・漢はともに唐人にとっては数百年前の過去の時代である、しかし、唐代の人々にとって、漢は強大で長く栄えた帝国として深い親近感があり、自分たちの国家をそれになぞらえることに民族的なほこりを感じていた。これに反して、その直前の帝国であった秦は、同じく強大でありながらはかなくついで去った国家という、うとましさを

伴う過去の時代として意識された。

第二句の「人」は出征兵士を指し、この詩を出征兵士自身の立場で詠うとすれば「わたしは戦争に来てまだ帰れない」となり、兵士の妻の立場で詠うとすれば「わが夫はまだ帰らない」となる。どちらでも通るが、どちらかといえば後者の方が樂府体のこの詩にふさわしいだろう。

この詩の場合、前半よりも後半の方に作者の詠いたい力点があるようだ。おそらく作者の時代にすぐれた將軍がいなかったために戦争に負けた事実があつて、このような、時の弱体化した軍に対する風刺となつたと思われる。

出塞行 王昌齡

出塞行 王昌齡

白草原頭望京師

白草原頭京師を望めば

黃河水流無盡時

黃河水流れて盡くる時無し

秋天曠野行人絶

秋天曠野行人絶ゆ

馬首東來知是誰

馬首東來知んぬ是誰ぞ

【意解】

白草の生えた原野のほとりに立って、都の方を望んでも都は見えず、ただ黄河の水が東に流れて尽きる時がない。



包頭（内モンゴル自治区）付近を流れる黄河

秋空のもと、はてしなくつづく広漠たる原野には往き
来の人の影も絶えた。その時、はるか向こうからただ一
人馬の首を東に向けてこちらへ来る者がある。都へ帰っ
て行く人か。あれはいったい誰なのだろう。

【字 解】

出 塞 辺境の塞（さい）を出て戦うこと。

白草原頭 白草の生い茂っている原野の辺り。

京 師 都、長安をさす。

秋 天 秋の空。

曠 野 何も無い広々とした原野。

行 人 旅ゆく人。

馬首東來 馬の首を東に向ける。

知 是 誰 誰であるかわからない。

【鑑 賞】

「馬首東來」を、馬の首を東に向けてこっちへやって来
る、とすると、この人物は作者のいる地点より更に西の
方から来ることになる。すると都の方を望む視線（東の方）
と逆方向となるが、作者が茫然として立ちつくして懐か
しい都の方を望んでいる、という姿から郷愁がかもし出
される。

「三体詩」には馬首西来とあり「西来」なら東の方から

やって来るのだから視線の方向と矛盾しない。句の意味は、こちらは東に帰りたい気持ちで一杯なのに、東から来る人もいる、という趣向になる。これも一つの情景ではあるが「馬首東来」の語には「自分の国へ帰っていく」という意味を持つ。「東来」の「来」は「くる」という意味ではなく、東へ向けるの意の助字ということになる。すると一句の意味は、都を望む作者の視線の中に（右斜または左斜の方向から）東へ馬首を向けてゆく旅人の姿がとらえられ、やがて夕もやの中へ消えてゆく、ということになる。

【備考】

唐代の詩の選集に「三体詩」があり、宋の周弼しゅうひつが、この詩を作者・李頎りき、題を「旅望」とするが「旅望」ならば楽府題ではなく旅の眺望の意となる。また字句の異同として白草原を白華原に、馬首東来を馬首西来とあるがここは「唐詩選」に従う。

王昌齡（六九八〜七五五？）（諸説あり）

盛唐の詩人。字は少伯。長安（今の陝西省内）の人。開元十五年（七二七）に進士となり、後に博学宏詞科に合格したが、官は秘書郎・童標の尉（県の検察事務担当官）にとどまった。安祿山の乱のとき郷里に帰り、刺史（長

官）の間丘曉りやまのあきに憎まれて殺された。詩は七言絶句にすぐれ、辺塞を詠んだ詩に佳作が多く、王之渙と並び称される。「王昌齡詩集」五巻がある。

王昌齡の経歴の中で軍役についていた様子はない。この当時貴族たちの間では経験した事のない異域での辛苦を歌う風潮が流行った。王之渙、高適などサロン詩人である。当時塞外の辺地に出征した詩人としては岑参と李益のみといわれる。

王昌齡（唐）？約七五六年
采蓮曲
荷葉羅裙一色裁，芙蓉向臉兩邊開。
亂入池中看不見，聞歌始覺有人來。



参考文献

- 「唐詩選上」……………高木正一著・朝日新聞社
- 「唐詩選」……………目加田誠著・明治書院
- 「唐詩解釈辞典」……………松浦友久著・大修館書店
- 「中国漢詩吟詠全集」……………後藤石韜著・吟濤社